

根津鋼材

自動化・DXに積極投資

青梅スリッター・レベラー改造

大手コイルセンターの根津鋼材（本社＝東京都荒川区、根津訓光社長）は4月から稼働を開始した青梅事業所（東京都青梅市）の潜在能力を最大限に引き出していくため、向こう2年間で自動化や省力化、DX（デジタルトランスフォーメーション）に積極投資する。

主要ラインのスリッター、レベラーを改造し、シャーリング機も1基更新。弾力性の高い生産体制の構築と作業負担の軽減、安全性向上を図る狙いだ。

同社は加工体制の最適化に向けた取り組みの一つとして、八潮事業所（埼玉県八潮市）の大型スリッターラインを10月末で休止。その加工の一部を青梅に移管することが決まっている。

受け入れ態勢を整え

るため、青梅の大型スリッターラインを無塗油材にも対応できるよう改造し、無塗油材専用のバックテンション装置を増設する。青梅は旧KCC時代から自動車向けを主体とし、スリット加工は塗油材のみだった。自動セパ

レーターも導入し、省力化と安全・生産性向上につなげる。レベラーラインでは、アンコイラーの改造と制御盤、操作盤など電気設備のリフレッシュを行う。アンコイラーはコイル内径の対応サイズを現在の最大

508mmから610mmに拡充し、508mm以上で必要だったゴムリソング挿入作業を解消する。

シャーリング機についても全2基のうち、オートシャーの1基を更新する。アマダ製ですでに発注を終えており、来夏以降の設置・稼働を見込む。

安全面は旧KCC時代からトヨタグループである豊田通商のグループ会社だったこともあり、厳格な基準で対策を講じてきており、構内には安全柵が張り



4月から稼働開始した青梅事業所

巡らされ、危険箇所には立ち入ることができないルール運用や、ゆとりを持たせた設備、作業スペースの配置となっている。

ただ、ほとんどの拠点で完全自動化されたラインを有する根津鋼材としては、安全柵をさらに増やしていく方針で、「自動化・省力化

など、人の負担を減らす投資を通して、安全面でもさらなる向上を目指す」（根津社長）。

青梅の主力向け先である自動車関連は季節による需要変動も大きい。同社では他拠点の加工を移管することで、稼働の平準化にも結び付けたい考え。足元の加工量は月間30

00トだが、八潮からの加工移管などで順次拡大し、同40000ー45000トまで引き上げていく。11月には人員補充も実施する。

根津社長は豊田通商グループの豊通鉄鋼販売から青梅を継承したことについて、「豊田通商グループさまには青梅事業所で従来通りの機能をご利用いただき、根津鋼材は今までになかった機能を補える。豊田通商グループさまとの関係が深まったことも大きな意義がある」とウィンウィンの事例であったことを強調。安全に問題なく事業を継承できていることが何よりで、KCC時代からのお客さまには引き続き活用してもらえよう機能向上に努めていきたい」と話している。